



学校だより

伸びゆく子

令和4年5月31日
横浜市立中沢小学校
6月号

『経験か安全か…鉄棒』

副校長 正木 俊行

今年度中沢小学校に着任しました副校長 正木 と申します。よろしくお願いいたします。

さて、いきなりですが、もし鉄棒さえなければ、しないで済んだ大きな怪我は結構な件数があるかもしれません。最近はいろいろなところで公園から危険な遊具や鉄棒が撤去されているという話を聞きます。実際に我が家のそばの公園でも、改修に伴い鉄棒が撤去されました。息子が初めて逆上がりができた鉄棒でした。

鉄棒で大きな事故に遭ったお子さんの保護者の方々にしてみれば、誰もがいつでも触ることができる場所にこんな危険なものを設置しておくこと自体、許せないことかもしれません。公園から鉄棒を全て撤去すれば、公園での鉄棒事故は間違いなく0にすることができます。逆に公園に鉄棒がある限り、公園での鉄棒事故は無くならないかもしれません。

学校にもまず間違いなく、ほぼ全ての学校に鉄棒が設置されています。私が通っていた東京の小学校は校庭がコンクリートでしたが、なんとそのコンクリートの上に鉄棒が設置され、普通に授業や休み時間に使っていました。当時の私にとっては普通のことでしたが今思うとちょっとぞっとします。小学校では、なぜこれほど危険だと認識されている鉄棒を指導要領に組み込んで、体育の学習で取り組んでいるのでしょうか？

以前、器械運動に精通されている校長先生が退官記念講演で鉄棒運動について述べていたことが、私の心に残っています。その先生がおっしゃるには、器械運動（マット、跳び箱、鉄棒）の中でも特に鉄棒運動によって、腕支持感覚、逆さ感覚、回転感覚を子どもに味わわせることができる。そしてそうした感覚を味わう経験が実は脳の発達にも良い刺激となる。また、鉄棒は何の準備もいらずいつでも触れることができる。だから、体育の鉄棒の授業を大切にしていけないといけない。というようなお話でした。その頃の私は、脳の発達と結び付けて鉄棒の指導をしていなかったのも、とてもびっくりしましたが、確かに鉄棒のいろいろな技をしている時には、普段経験できないような感覚を味わうことができます。上述の先生がおっしゃっていた感覚以外にも、いろいろな方向へ遠心力がかかっている感覚、浮遊感、不安感、恐怖感、手にじっとりとした嫌な汗が出てくる感覚、不安感・恐怖感に立ち向かう勇気や気力、できない悔しさ、もう少しでできるかもしれないという希望、手のマメがつぶれる痛み、できたときの達成感・・・、鉄棒をがんばろうと思った人なら誰でも、このような感覚を味わったことがあるのではないのでしょうか？ このような感覚を経験することは確かに人間の成長にはプラスに働くと思えます。

体育学習で行う鉄棒運動では、事故が起こらないように、様々な安全対策をしています。準備運動、慣れの運動、場の設定（使用する補助具・安全具や人の待機場所など）、安全な補助、個に応じた課題設定、段階的な指導など・・・。私自身も学級担任だったころは、鉄棒授業の最初に今まで経験した事故や聞いた事故について子どもたちに話し、しっかりと危険予測をさせます。時には子どもたちから、「先生の話怖すぎるからもうやめて。」と言われるぐらい話します。そうすることによって、子どもたちの鉄棒運動に取り組む真実度も変わってきます。また、やっとならできるようになった大技、例えばこうもり振り下り、グライダー（飛行機飛び）、巴などは、例えできるようになっても、「まだ、先生が見ていないところではやってはだめだよ。」「まだ、マットを敷いていない鉄棒ではやらないでね。」と念を押して授業を締めくくります。それでも2～3年に1度は、「こうもり振り下り失敗しちゃった。」とあって、顔を擦りむいた子が私のところに恥ずかしそうに報告に来ます。

副校長になるともう滅多なことでは、体育の授業を行うことはないのですが、休み時間に鉄棒に行かせてもらっています。休み時間で対応できる補助具を使ったり、適切な補助をしてあげたりすることで、安全に、でもしっかりと新たな自分に挑戦していける機会になってくれれば嬉しいです。今は「コウモリ振り下り」という技が流行っています。みんな膝裏が真っ赤です。鉄棒が得意な子の中には、座った姿勢から一気に下りる「地獄コウモリ振り下り」という高難度の技に挑戦し、成功させた子も何人かいます。

危険な運動や遊具を全て禁止し、最終的には「転んだら危ないからかけっこなんかしてはいけません。」というような世の中にならないことを願っています。また、そうならないように学校教育でも適切な体育学習を行っていきます。